

特集Ⅱ 追悼：鑪 幹八郎先生

鑪 幹八郎先生を偲んで－院生時代の思い出

岡田 康伸

京都大学名誉教授

鑪 幹八郎先生の特集に一文を寄せるように依頼された。いろいろなことが思い出されるが、他の寄稿者の思い出と重ならないためには、筆者が院生時代の研究会の様子を記すのが良いと思い、以下の文章となった。

鑪先生は精神分析家として知られているが、実は、初期の段階では、ロジャーズの非指示的療法の先端を走っておられた。相棒として、西園寺先生（西園寺公望の孫と言うことであった。）がいつも付き添っておられた。2人の関係の詳しいことはわからないが、外から観て相当年齢差があることから、西園寺先生が父親で、鑪先生が息子のようであった。鑪先生は余り話されず、西園寺先生が主役のようであった。学部3回生のころ、カウンセリング実習に、鑪先生が非常勤でこられるときは、必ず西園寺先生が付き添われていた。あたかも息子を心配する親のように。授業は西園寺先生が自分のケースのテープをだされ、学生はそれを聴いて、話し合うものであった。タイプで打った逐語録がついている。当時はパソコンでなく、日本語の文字タイプであったから、その手間は計り知れないものであったろう。テープを1時間聞き、その後、皆が感想を言い合って授業が進められた。もちろんここでも、西園寺先生が主役であった。鑪先生はなにをしておられたのか。私たちの時は何事もなくすんだ。しかし、聞くところによると、この形態に、倉光氏のときに、問題にして、西園寺先生を追い出したと言うことである。逐語録を観ながら、テープを聴く訓練は最近は

あまりみられないとおもうが、1度はこの訓練をした方が良い様に思う。一字一句に敏感になれるからである。当時は応答練習といって、クライアントがなにをかんでいるか。なにをいいたいかを考え、セラピストはその時どういうかを単文に反応するやり方もあった。これも1度はやっておいたほうがよいかも。たしかに、全体のながれのなかで、セラピストはクライアントの言葉に反応するので、単文ではそれが解らないのであるが。

この訓練では実際のテープを聴いていたのであるが、クライアントの許可を得て、テープに録音していたのである。許可なく、テープにとることもあった。今では決してあってはならないし、考えられないことであろう。

鑪先生が非常勤でこられた夜には研究会をもった。この時は鑪先生のテープを聴かせてもらった。西園寺先生も来られていたと思う。中年の女性のケースであったと思う。実はセラピストである鑪先生はクライアントの女性のいいことをまったく聞いておられない。みんなが異口同音に指摘するのだが、全くの盲点であった。研究会のあとは飲み会である。6～7人の会なので、楽しかった。みな酒に強かった。鑪先生は特に強かったと思う。この研究会で、我々院生は初め、鑪先生と呼んでいた。しかし、あるとき「先生はやめてほしい」と言いだされた。それ以後、鑪さんと呼ぶことになった。これが文教で鑪先生と再会したとき、困ったことになった。つい、「鑪さん」と言ってしまう。

学長であったからなおさらである。「いや、鎌
学長」と冷や汗をかいたことが多々あった。鎌
先生、安らかにどうぞください。